

シリーズ「エスペラントの今」 No. 7

エスペラントの現状を様々な面からご紹介するシリーズの第7回目をお届けいたします。
ご質問、取材問い合わせ等は、当協会広報委員会までお願いします。

■エスペラント訳聖書完成90周年

聖書はユダヤ教およびキリスト教関連の宗教では、もっとも重要な宗教文書であり、なかでも、旧約聖書は、ユダヤ教の教典・正典であり、イスラム教の教典としても知られています。旧約聖書と新約聖書をあわせて聖書と呼ぶのはキリスト教の立場に基づくものです。(注1)

聖書は、約2480の言語に翻訳され、(2009年時点で)世界一発行されている本としてギネスブックに登録されています。翻訳された言語の中には大国の言語はもとより、アイヌ語やマン島語(ゲール語の一つの方言)の少数言語や、エスペラント語のような考案された言語の翻訳もあります。(注2)

エスペラント訳聖書には、特筆すべき2つの特徴があります。

聖書の翻訳は、多くの場合、宣教目的で赴任した宣教師が、自らが知る言語の聖書から現地語に翻訳していたので、ラテン語や宣教師の母国語からの重訳となることが普通でした。しかし、エスペラント訳聖書は当初から重訳ではありません、エスペラント語の考案者ザメンホフがヘブライ語に通じていて、旧約聖書は原語であるヘブライ語からエスペラント語に直接翻訳されました。新約聖書もギリシャ語原典から識者によって翻訳されました。これが、ひとつめの特徴です。

1887年エスペラント語の「最初の本」発表のあと、エスペラント語は、フランスやドイツ、ロシアの仲間たちに支持されて広まっていきました。その本には、早くも、旧約聖書の『創世記』冒頭のエスペラント訳が掲載されていました。1892年には、聖書のエスペラント訳が提案され、各国のエスペラント語の使用者たちの翻訳協力、資金援助が始まりました。

1912年には、エスペラント訳の新約聖書が刊行されました。いまでこそ各国語の聖書は、現代語で訳されていますが、1912年当時では、聖書の訳は一般的に古文体で書かれていたので、読みづらいものでした。エスペラント訳聖書は、現代的で平明な文体で登場したため、各国語の聖書よりも読みやすいと評判で、今に至るまで、当初の訳がほぼそのまま読み親しまれています。エスペラント語の聖書翻訳としては、かなり先行していたのです。これがふたつめの特徴です。

1926年に、先の新約聖書の改訂版に旧約聖書も加えた聖書全巻も出版されたことで、エスペラント訳の聖書が完成しました。エスペラント語が発表されて、39年後のことでした。

2016年、聖書完成90周年の今年、10月8日から10日 滋賀県近江八幡市での日本エスペラント大会(注3)の場で、エスペラント訳聖書翻訳の歴史について、研究発表と、貴重な資料を映像化したスライドショー展示が行われました。

大会会場となったヴォーリズ学園は、1905年英語教師として来日しキリスト教布教活動に力を注いだウィリアム・メレル・ヴォーリズが創立したキリスト教精神に基づく学校です。大会開催を記念して、大会参加のキリスト者のひとりよりエスペラント訳聖書が学園に寄贈されました。

(注1) Wikipedia 聖書 参照

(注2) Wikipedia 聖書翻訳 参照

(注3) 毎年日本国内外のエスペラント語の使用者が集まるイベント。

<http://www.jei.or.jp/evento/2016/jek>